



THINK × ACT
KANSAI
UNIVERSITY

教職支援センター一年報

2011

関西大学 教育推進部
教職支援センター

『教職支援センター一年報 2011』目次

教職支援センター一年報の発行に寄せて	教職支援センター長	山本 登朗	1
国際社会で生きる子どもの育みと教員の海外での教育活動経験	特任教授	竹内 啓三	2
「打たれればキャッチャーの責任、・・・」	特任教授	辻本 修一	4
子どもと共に学び、誇りを持って実践できる先生への夢			
教員志望者を全力で支援します！	教職アドバイザー	藤井喜代美	6
東日本大震災以降、考えていること—自分を鍛えるボランティア活動—	教職アドバイザー	尾島 重明	8
投稿原稿			
歴史学の観点から見た大学での歴史科教育学の意義	非常勤講師	比佐 篤	10
実践的指導力の養成と“教育原理”	非常勤講師	上田 浩史	16
報告 地理歴史科教育法における模擬授業の実践から	非常勤講師	高橋 陽子	22
教師受難の時代に教職を志す皆さんへ——中学校教育が危機——	非常勤講師	服部 千秋	28
3年次生対象教育実習ガイダンス記録			34
教員採用試験合格者との情報交換会			52
各キャンパスにおける教職相談			65
千里山キャンパスにおける教職支援内容			67
教職支援センター中期行動計画			68
教員免許状更新講習について			70
〈統計・データ関係〉			
各学部・大学院で取得できる免許状の種類・教科			72
介護等体験参加者数			74
教育実習生数			75
教育実習出向指導校一覧			76
教員免許状取得状況			78
教員採用試験合格者数			84
教員採用試験「大学推薦」の応募状況・合否結果			87
教職に関する専門教育科目担任者一覧			88
〈その他〉			
講演会関連資料（理数科の教員をめざそう）			93
本学卒業新任教員との情報交換会			98
教職専門科目担当者研究会			99
教員採用試験合格者壮行会			102
教職実践演習新設に伴う自己評価シート			103
〈委員会関係〉			
教職支援センター委員会委員名簿			104
〈規程等〉			
教員養成のための豊能地区3市2町教育委員会との連携協力に関する協定			106
教職支援センター一年報 投稿規程・執筆要領			107
教職支援センター規程			109

報告 地理歴史科教育法における模擬授業の実践から

関西大学非常勤講師 高橋 陽子

はじめに

本稿は関西大学の法学部と文学部、政策創造学部の学生を対象とした地理歴史科教育法の授業実践に関する報告であり、当該科目の中でも特に歴史分野を扱うものである。

筆者は当該科目を1993年から担当しているが、当然のことながら、約20年の間に大きな変化があった。最大の変化は、講義中心の授業から模擬授業が重視される方向へと変わったことである。それに合わせて、1クラス当たりの履修者も当初の100名以上から30名程度へと減少した。従って、授業運営も大きく変わった。履修者数の減少により、全ての学生が模擬授業を行えるようになったことは大きな前進であり、また個々の学生についてもきめ細やかな対応ができるようになった。後述するように、提出レポートを添削指導後に返却するのも可能になった。¹

また筆者自身の実践として2008年度にビデオ撮影を導入し、模擬授業の映像データを残している。本稿においては、このビデオ撮影の実践報告も併せて行う。

1 授業の運営

2011年度から半期の授業回数が15回に増加した。したがって、昨年度までの授業とは若干の変更点があり、本稿執筆の時点では全ての課程が終わっていない上での報告であるのをお断りしたい。

最初の3回では、地理歴史科教育法の運用方法の説明と、教材研究や板書方法などの授業実践に関する基礎知識の講義を行う。特に初回においては、模擬授業をはじめとする授業進行に関する説明をかなり詳細に行ったうえで、予定表と注意点を記したプリントを配布している。予定表には模擬授業のテーマや、合計3回の提出を義務付けているレポート提出日も明記しており、学生は予定に従って計画的に授業に臨むことになる。

その中で学生に対しては、模擬授業を1回、毎回の模擬授業に対する評価レポートの提出、また日本史と世界史の授業設計のレポートをあわせて2回、3回目のレポートとして指導案の提出を義務付けている。これだけでも、学生にとっては負担の重い授業となり、さらには無断欠席を5回した段階で単位不認定という規定も設けている。

次の4～6回目において日本史の模擬授業が行われ、第7回目の授業では指導案の作成指導を行う。本年度においては作成法と併せて、授業への実際の応用例をかなり詳細に紹介した。その理由として、日本史の模擬授業全体を通じて全学生が非常に似通った授業進行をしていたことが挙げられる。本年度に限れば、第8回目以降の世界史の模擬授業の進

¹ 以前の授業運営に関しては、拙稿(1998)「『地理歴史科教育法』における現状」、『関西大学教職課程センター年報』第12号、84～94ページ。同(1999)「報告:模擬授業の諸問題」『関西大学教職課程センター年報』第13号、27～36頁。

行において改善が見られたので、授業実践の実例紹介は有意義であった。世界史をテーマに3回、さらに日本史と世界史の両分野から「現代史」と「テーマ史」の形でそれぞれ2回の模擬授業を行い、第14回目で模擬授業は終了となる。最後の15回目は模擬授業の講評と最終のレポート提出で締めくくる。

15回中10回において模擬授業が実施されているのにあわせ、成績における模擬授業の配転も非常に高く、模擬授業の実施と授業評価レポートを併せて、百点満点中の50点の配点となっている。

さらに3回レポートを合計して50点とし、さらに詳しい配点を挙げるならば、第1回目が10点、第2回目が15点、第3回目が25点である。レポートはA4版の用紙に手書きをするようにと、口頭で説明し、さらには予定表にも明記をしているが、一部学生にはなかなか徹底しないのが現実である。そこで第1回目と第2回目のレポートに関しては、添削指導をして返却し、次回以降にミスが改善されているか否かも評価の対象にしている。そのために、提出されたレポートは全てコピーを残している。

近年のレポート内容を見る限り、残念ながら学生全般の漢字力や文章能力の低下は否定できない。一部の学生に関しては、文字そのものを丁寧に書く習慣がないという印象を受ける。罫線つきの用紙を配布しても、罫線を無視して記載しているものがあつたり、文字そのものの大きさがバラバラであつたりする。板書その他において、文字を手書きする場が多い教員を目指す立場としては、重大な問題である。もちろん、中学や高等学校においては授業の能率を上げるために、授業用のプリント配布が当たり前のことになっている。ノート作成などにおいて、手書きの機会が減っているのが影響しているのかもしれない。今年度の模擬授業では、ほぼ全員がレジュメを配布していたのも、自らが受けてきた授業を反映していると想像される。

2 模擬授業の運営

今年度の授業における9月末の履修者は30名と、全員の模擬授業を割り当てるのが可能な人数である。しかしながら、全員が50分授業を実施する時間はないので、1人あたり15分から20分の時間配分で模擬授業を行っている。現状では、学校の教室においても電子黒板や、その他の視聴覚機材が導入される傾向にある。しかし、筆者が担当する模擬授業において目指すのは、「授業の基本を体得」することである。そのために教科書を用い、板書と講義を中心に模擬授業が進行することになる。

教科書に山川出版社の『詳説 日本史 B』と『詳説 世界史 B』を用いているのは、これらの教科書が最も入手しやすく、かつ多くの高等学校で採択されているという事情による。さらに、本授業の履修生が中学社会あるいは高等学校の地理歴史科の教員採用試験を受験すると想定し、教員採用試験対策に役立ててほしいという考えもある。採用試験の専門試験を見ると、高等学校B科目の内容が最低限の基準となるだろう。学生の中にはA科目のみの履修者がかなりいるため、近代以前の比重が大きいB科目の理解を深めるためにも教科書を活用してほしい。さらには、高等学校の地理歴史科の免許取得のための本授業

で、中学社会の内容を使って模擬授業やレポートを作成する学生が何人かいたことも挙げられる。

各回の模擬授業は一定のテーマに沿って3人の学生が担当している。大きな流れとしては、日本史と世界史が3テーマ（それぞれ政治、文化、社会経済から1テーマ）、現代史から3テーマ（本年度は「20世紀初期」、「第一次世界大戦」、「20世紀後半」）、そして古代・中世のテーマ史が1回（本年度は「エジプトの統一国家」、「ユダヤ教の成立」、「鎌倉仏教」と宗教史中心）という構成で計画を立てている。さらに細かく見ると、第1回目の模擬授業は日本史の「明治維新」から、3人の学生が「戊辰戦争と維新の改革」、「廃藩置県」、「地租改正」を扱った。この模擬授業の担当者は初回と2回目の授業において学生から第3希望までを聞き、担当者を決定する。

担当者決定はかなりの労力と時間を必要とする作業である。本年度は、日本史に希望者が集中し、世界史と現代史にはほとんど希望者がいなかった。全てのテーマに担当者を割り振り、かつ介護実習その他の予定に合わせて日程表を組み立てていかねばならない。また1・2回目の授業に欠席する学生がいるのも悩みである。本年度では、大学のインフォメーションシステムの「伝言板」と「関大 Web メール」を利用したが、それでも連絡ができない学生がおり、これらのシステムが十分に機能していないと痛感した。さらには最初、あるいは途中から履修を放棄する学生もおり、模擬授業そのものが空白になってしまうこともある。履修をやめる際には連絡をしてほしいとは伝えているが、学生にしても申し出にくいことであろう。授業担当者の立場上、不測の事態に対応するための講義の準備も欠かせない。

上述のように 学生は予定表を踏まえてレポート提出や模擬授業を行うことになっている。さらに、第1回目の授業の際に全員が「名札」を作成し、生徒役の学生はそれを机の上に置くことになっている。模擬授業担当者が生徒役の学生を指名しやすくするためである。²

模擬授業は15分から20分で行うことになっている。15分に設定したタイマーを教卓上に置き、残り時間を確認にできるようにしている。テーマによっては15分では足りない内容もあるが、その場合はテーマの一部のみを取り上げて授業をするようにと指導している。「時間が足りない」と訴える学生もいるが、実際の教育現場で教えている教員も限られた時間の中で授業を行っているのだと伝え、納得してもらっている。

さて、昨年度までは「トリビア」と称し、模擬授業のテーマに関連する話題を毎回2～3人の学生に報告させていた。模擬授業以外にも、教室の中で「わかりやすく伝える」体験をしてもらい、かつ教科書以外の文献にも接することが狙いであった。事前に注意したのは、参考文献を必ず挙げることと板書をするのであり、原則としてネットの情報は不可とした。この試みはほぼ10年近く続き、当初は学生も意欲的に取り組んでいた。昨年度も、授業のテーマを踏まえた上で、専門書や概説書などの文献内容を上手に消化し、上質のトリビアを提供する学生がいた。模擬授業よりもトリビアを楽しみにしている学生も

²名札の形状については拙稿（1999）「報告:模擬授業の諸問題」『関西大学教職課程センター一年報』第13号に掲載されたものと同様である。

いたほどである。しかし、テーマ内容を表面的に把握しただけで、模擬授業と関係のないトリビアを発表する学生も増えてきた。また、参考文献も『歴史の裏話』的なものをそのまま読み上げる者もあり、さらに近年ではネットの情報を内容の検討もせず発表する者も増えてきた。そこで今年度からは1回の模擬授業につき2名の担当者を決め、授業内容についての質問をすることにした。テーマや模擬授業の内容により、質問ができないことがあるのも現実である。また、模擬授業を行った学生の側も、扱った範囲を少しでも外れると、質問に答えられないことが多々あった。

なお、全ての模擬授業に関して、生徒役の学生は「授業評価レポート」を提出することになっている。模擬授業を行う事も大切であるが、他の学生の授業を実践に生かしてほしいという狙いがあることである。さらに、教師には生徒を評価する仕事もあるので、生徒を納得させる評価を書く練習であると位置づけている。上述したように、このレポートも評価の対象となっており、その点を事前に学生にも伝えている。行われた模擬授業についての的確な指摘をするものもあれば、どの模擬授業に対しても同じ内容で済ませているものもある。筆者による評価と学生のレポートの内容を併せたものを紙面にして、模擬授業の翌週に手渡している。また、学生の手による評価レポートも最終の授業までには授業担当者に手渡す予定である。

3 ビデオ撮影の試み

2008年度、そして2010年度と2011年度（本年度）から模擬授業のビデオ撮影を本格的に始めた。したがって、本年度は3年目の試みということになり、実践内容がそれほど蓄積されていないために、簡単な報告にとどめたい。

カメラは教室の後部に、模擬授業が行われる黒板全体が入るように固定して設置している。筆者がカメラを持参し、授業前にセッティングをしているので、かなり忙しい。特に今年度は、同じ教室を直前の授業で使用しているために、10分の休憩時間にセッティングと共に、名札や授業評価レポートの用紙を配布しなければならない。改善のために授業支援のSAを利用することも考えているが、使用しているカメラが筆者の私物でもあるため、スムーズにいかない面があると予想される。

ビデオ撮影に踏み切った最初の理由は、良い模擬授業の事例を残したいというものである。講義の中でも良い模擬授業の事例を紹介しているのだが、口頭で説明するよりは、映像で、それも学生が創意工夫をして授業をしている姿を見ることが、現在の学生にとっても参考になると考えた結果である。もちろん、授業中に映像を公開するのは、当該学生が卒業した後である。本年度は2008年度の模擬授業で良い工夫をしているものがあったので、その映像を使用する予定であったが、教室にDVDの機材がなく利用できなかった。

さて、ビデオ撮影によるその他の利点について見ると、模擬授業を行う学生に緊張感が生じたことである。授業担当者である筆者にすれば、模擬授業を落ち着いて見直すことができるのが最大の利点である。地理歴史科教育法の担当者として、授業中は教室全体の動向にも配慮しなければならないが、模擬授業に集中できないことが多々ある。授業評価レポー

トにおいて生徒役の学生が指摘した点を見落とすこともある。また、評価レポート中で指摘された内容についても改めて確認できる。模擬授業も成績評価の一部であるから、客観的な評価の証拠を残すことにもなる。

なお、ビデオの映像の中で最も役立っているのが板書内容の見直しである。板書そのものの内容だけでなく、書かれた順序や筆順の誤りまでが確実に残される。映像一般を見ると、教材研究不足で内容が消化しきれていないのか、メモに視線が集中している学生が多い。評価レポートにおいても、この点の指摘が最も多いのだが、他の学生については指摘しているものの、自分自身が模擬授業の担当者になった場合には、同じ事を繰り返しているのが現実である。全くメモやノートを見ずには講義はできないので、最終の15回目の授業ではこの点の指導も重点的に行う予定である。

映像データの全ては DVD に残しており、希望する学生には自分自身の映像をコピーした DVD を手渡している。自らの授業映像を参考に、反省をしてほしいと願ってのことだが、残念ながら DVD を希望する者はほとんどいない。また、この DVD は教職支援センターに保存し、教職科目担当の他の教員が利用するなどの活用方法を思案中である。ビデオ撮影は来年度も継続する予定なので、数年分の授業実践が蓄積された時点で、いずれ詳細についてご報告したい。

4 結びにかえて：授業運営上の問題点

ここで述べることは地理歴史科教育法にとどまらず、全ての授業について言える問題であろう。大半の学生は熱心に取り組み、地理歴史科の教員として仕事をしていく上での学力も問題はない。しかし一部の学生が、他の一般学生と比較して相当に学力や知識量の面で劣っていることは否定できない。地理歴史科という教科の性格上、知識的な内容は努力で補えると考えられるのだが、模擬授業やレポートを見る限りでは、その努力の痕跡も見られない。学生の間において、学力や意欲に差が見られるので、これは学生個人の問題であろう。来年度以降は、第1回目の授業において日本史と世界史の基礎知識を確認する試験を導入し、学生全体の学力をはかることも考慮している。

さて、近年の教科教育法が模擬授業中心になったために、講義形式で伝えたい内容を扱いきれないのが悩みである。特に高等学校の歴史を教える上で理解しておくべき封建制、絶対主義などの「概念」を、十分に扱うことができない。模擬授業に欠席者が出た時間帯を利用して、教科書に書かれている用語や概念の背景について講義するのがせいぜいである。つまり、教科書に記載されている問題となる概念の「意味」、「教える側としてはどのように理解すべきか」、そして「生徒に教える時にはどの点が重要なのか」などの内容を十分に伝えることができない。筆者の学生時代には、教員採用試験で高等学校の歴史科目を受験する場合には、中央公論社の『日本の歴史』や『世界の歴史』に目を通すべきであると言われたものである。だが、今ではそのような指標もなく、学生の努力に任せるには限界もある。地理歴史科教育法のための歴史の講義も、いつかは必要になるのではないだろうか。

今年度の模擬授業で気になったのは、判で押ししたように同じ形式の模擬授業が続いたことである。最初の3回の模擬授業で9人の学生全員が、生徒を指名して教科書を読ませるという導入を行った。その理由を学生に聞くと、別の教科教育法授業で評価の高かった方法であったからだという。つまり、「生徒を指名して教科書を読ませる」イコール「生徒とのコミュニケーションがとれている」ので良い授業であると考えていたようである。これは学生の誤解によるものであり、指導された先生の意図をはずれていると思われる。学生の評価には相当な注意が必要であると感じた出来事である。常にその方法を採用すると、現実の授業では時間的に対応しきれなくなると指摘した上で、別の方法を考えるよう促した。大学の授業なので単位認定があるのは当然であり、その単位が教員免許の取得に関わっているのが関係するのも現実である。高い評価がなされた方法を、そのまま利用しようとする学生の安全志向が気になった。

また模擬授業に履修者全員を関与させるのは、人数によっては非常に難しい問題である。本年度の筆者の場合、1回につき3人の模擬授業ができたが、これが40名あるいは50名となると相当な困難をきたす。1人の持ち時間を減らして、1回あたりにさらに多くの人数を割り当てる方法もある。だが、学生には授業評価レポートを義務付けているため、じっくりと授業を見た上でのレポートを書くためには3人程度が限度であろう。筆者の場合、幸いにして、履修者は最大で30名以下という年度が続いており、この点では問題は無い。しかし、年度や担当者によって履修者の偏りがかなりあるので、何らかの形で人数調整を行ってほしいという要望が、教科教育法の担当者の中にある。本年度の場合、4月当初の履修者数は40名であったが、それが9月末には30名に減少していた。模擬授業を中心にした教科教育法の授業の運営にとって、この10名の違いは大きなものである。

最後に、学生たちが中学や高等学校において接してきた歴史教育について、調査する必要があると思われる。模擬授業は自らが受けた授業の痕跡を多く残す傾向がある。本学の学生の大部分がいわゆる進学校の出身者であろうが、彼らが受けてきた歴史教育が大学入試対策のために効率重視だったのではないかとの印象を受けた。たとえば学生が授業で重視する内容が用語中心になりがちであり、また「試験では」という言葉が頻出する場面が多々あった。用語が中心であっても、その背景を的確に説明していれば問題は無いが、そこまで踏み込んだ授業にはなかなか出合えなかった。歴史の研究者である筆者の立場としては、教科書の範囲内でも良いので歴史の教材そのものに、真摯に向き合ってほしいと考えているのだが、現在の学校現場の時流に合わないのだろうか。歴史だけでなく、他の教科にも同じような知識の断片化あるいは浅薄化が進行しているのではないかと危惧しているのを申し上げ、締めくくるとしたい。